

釣れ釣れなるままに

2000年思い出の釣行記 PART. 5

# アブラコに捧げる 歓喜の踊り

**鹿島釣狂**



## 釣遊会第5回大会

☆開催日	平成12年9月10日
☆開催場所	小平町～苫前港
☆入釣場所	古丹別川→三豊海岸
☆潮	干潮 19:47 15cm
	満潮 3:45 31cm
	干潮 8:55 29cm
	満潮 11:30 30cm
☆釣果	アカハラ 476mm 4
	ハゴトコ 242mm 1
	重量 3600g
☆成績	合計 1078点
	順位 2位
	持ち点 2点
	累計点 28点

### もったいない攻撃

夏の狂暑を凄いで2カ月ぶりの例会の日がやって来た。今日は週休日であり、朝から特に急を要する仕事も入らず、のんびりとエサの買い出しや、仕掛け作りに没頭することができた。

今回の大会はアカハラ釣りがメインとなるのでエサとしてイカゴロ120本を用意した。他に1匹の嫁さん対策のために、イソメ、岩虫、サンマを用意する。さらに、「ホッキ貝にアカハラの大物が来る」と言う先輩の教えに心が動き、殻のついた大振りの物を2個購入する。早速、我が家に持ち帰り、魚の口に合わせて捌いていると、女房が目ざとくそれを見つけ、例の「もったいない」攻撃が始まる。いつものエサ購入の事を考えると、これぐらいはさほどのことではないと思いながらも、そう言うのをためらう。イカゴロだけでも $330 \times 12 = 3960$ 円とはとても言えず、代わりに貴重なホッキの切れ端を彼女の口に入れる事になる。ビカビカと光った旬の生サンマも1本だけをエサにして、残った3本は冷蔵庫に収まる事となる。

新しい仕掛けづくりに挑戦してみた。舟釣り用の腕の長い天秤50cm程にイカゴロ針をつけて見た。イカゴロの重みに負けて両腕がだらんと下がってしまいそうだが、魚を誘うように揺ら揺らと微妙な動きをする。唾え込んだ後の抵抗も少ないので食い込みもいだろう。上針には、ホッキ貝のエサで大物に対応できるように7号のチヌ針をつけた。

### 時間との戦い

集合時間が近付き、最後に到着した仲間を乗せるや否や、慌ただしくバスが発出した。

本日はこの区間に、分かっているだけでも5つほどの釣り会（医釣会、名人会、新釣会、親鱗会、屯田釣友会）が大会を開くことになっている。どの釣り会も他の会より少しでも早く釣り場に着き、場所を確保したいとの願いは同じなのであろう。この区間の海辺にはアカハラはどこにでもいるが、50cmを越えるものを揃えるとなると、ポイントは限られてくる。そんなわけで、バスの中でも情報が飛び交う。

「◇◇会は◆◆時に出発した。」

「札幌から出るとなると、我が会より30分程遅れる。」

「☆☆会は高速を使っているようだ。」

「◎◎会は近道を通ったらしい。」

さらに、本日は小平菘川河口にほとんどの会員が入釣するらしく、普段、情報等でお世話になっている先輩との恩義の関係もあるらしい。

話が煮詰まって来て、我が会でも高速を使う事となった。しかも、いつもは、着替えをするためにバスを停めて外でのんびりとしていたのが、バスの中で着替えを行うと言う。たかがアカハラ釣りとは言え、大会となると異常に目が血走ってくるのがわかる。闘争本能に火が付いてしまうのだ。

バスは快調に留萌に着いた。しかし、トイレタイムを兼ねた食料の買い出しのためにコンビニに寄っていると、著名な札幌の釣り会のバスが颯爽と追い抜いて行った。バスの窓からは、にやつき勝ち誇った顔が見える。この時点で、我が会員は（もちろん私も）さらに入釣場所で悩むことになる。

## 割り込み禁止

会員のほとんどがやはり小平菘川に入るといふ。その河口には私が竿を出すようなスペースはないと考えられる。著名な釣り会もあるというから、未熟な私などは弾き出されてしまうだろう。

「どのくらいのスペースがあれば隣に入っているのでしょうか？」と嵐氏に尋ねる。嵐氏がそれに応えて、竿を横にして両隣にそれぞれ1本分もあればよいのでは・・・と告げてくれる。

その昔、海釣りを覚えたての頃、よくこの周辺にカレイを釣りに来たことがある。富岡、大根などの海岸はゆっくり竿を出せる状況であったが、ホッケが岸寄りする一時期、竿が林立することがあった。その時は、仲間4人で竿1本分ぐらいの間隔を保って釣っていたのだが、私の両隣に僅か1メートル程の距離で入って来た御仁がいた。呆れて、釣り人の少ない広々とした砂浜に4人で移動したが、その場所の方が釣果がよかったという思い出がある。

## 水が交じり合うところ

入釣場所は、古丹別川河口に決定した。

昨年の事もあるので（北海道の釣り2000年9月号参照）、帰り道は旧道を通る事を運転手と苫前漁港にただ一人入る秦野氏に確認してからバスを降りた。古丹別川に架かる橋から河口までは500m程あるが、初めて入った昨年のような苦労はなく、すんなりとたどり着くことができた。しかし、河口から右へ400m程の範囲にわたって、先に来た釣り会のメンバーが所狭しと竿を立てている。所々に青白く光ったギョギョライトが海面に向かって突っ込んでいるのも見受けられる。ちょうど「海の水と川の水が交じり合うところ」に竿3本分ぐらいのスペースがあったので、声をかけて間に入れさせて頂いた。「川と海の水が交じり合う所。大物はそこにいる。」と聞いていたので、これ幸いとほくそ笑む。釣りを覚えたての昔とは違い、お祭りすることもないだろう。両隣ともかなりのベテランのようである。

私より左側（河口寄り）には2名が入っている。こちらの方はあまり心配はないのだが、嫁さん用に遠投した竿の道糸が潮の流れのために右方向に寄って行くので左の方に打つように心掛けた。それが功を奏してか、最後まで一度もお互いにお祭りし合うことはなかった。

## 嫁さんは？

早速、新しく開発した仕掛けにイカゴロとホッキをつけて打ち続ける。間もなくアカハラが次から次へとかかり出す。どれを見ても30cm～35cmぐらいのものである。1時間も経過したころ、ようやく40cmを越えるものがポツン、ポツンとあがり出した。遠投した竿にはチビウグイが竿を揺らすばかりで、嫁は来ない。そうなりと辺りの様子が気になり出し、400mぐらいを往復しながら釣果を尋ねると、アカハラは大きくても40cm止まりであり、嫁は全くいないとのことである。昨年は私も含めてソイが何本か上がったのだが・・・。元の場所に戻り、さらに打ち続けることになる。

竿から目を離している隙に40cm級のアカハラとは明らかに違うアクリが来ている。腰をためて竿を煽るとグングンと沖に向かって突き進む。50cmを越える大物を予感し、慎重に慎重に寄せるとバタバタと4本のアカハラが上がって来た。今回の仕掛けは親針、子針、孫針とした。親針はイカゴロの耳をかけるだけであるから海津の18号、そして子針と孫針は丸セイゴの15号である。少し目を離している隙にその仕掛けの子針にも孫針にもアカハラが食いつき、一本の竿に4本のアカハラがついて来たのだ。

遠投していた竿にカレイ独特のアタリがある。慎重に合わせて取り込むと、規定の15cmに満たない川ガレイが2匹ついて来た。2匹合わせた身長とまでは言わないが、せめて規定に足りるものであればと思うのは嫁のいないやっかみなのか。

左に向かって道糸が急速に移動した後、糸フケが出た。大物だ！糸フケを取っていると、グーン、グーンと大きな抵抗があり、合わせをくれて少しずつ岸に寄せる。波打ち際に大きなオビレが見える。竿を寝かせて慎重に取り込む。大きなアカハラだ。バツカンに入れるとオビレ部分がグニャリと曲がっている。50cm近いものが上がった。

右隣りの人が場所を移動して行った。少しずつアタリが遠のいてきたこともあり、少し右に場所を移動する。ここでも、主流は35cm～40cmであったが、その中に45cm程のものが何本か上がった。

## 嫁さんを！

4時頃、用意したイカゴロを全て使い切ったので移動のために片付ける。45cm以上のアカハラ4本をバツカンに入れる。4本目はどれも似たようなものばかりで選ぶのに迷ったが、まだ時間があることもあり自製の天秤ばかりで順次、重さを比べることとなった。4本目を選んだところで嫁さん捜しに場所の移動である。昨年、アブラコとクロガシラをダブルで引き抜いた御仁が陣取っていた所を目指して歩きだす。嫁を取るという目標も入釣場所も決まっているので、足どりには勢いがある。かなりの距離を歩くことも予定のうちなので前回購入した安物のキャスターが一層足どりを軽くしてくれた。

私が新天地に向かう途中で、名人会の☆☆（名前はベストの背中に刻まれているのだが差し障りがあると困るので）氏が竿を振っていた。嫁さんを求めて盛んに遠投している。後になって他の釣り会のメンバーに聞いたことだが、アブラコの嫁をしっかりと確保していたとのことである。さすがは名人会である。

予定の入釣場所には先客がいた。釣り会ではなく個人で来たとのこと。挨拶を交わした後、早速隣に入れていただく。右側20m程の浅場に昆布根が見える。その手前に打ち込んだ竿から早速の便りである。アタリも小さく手ごたえも軽いが、初の嫁を信じて慎重に取り込むと、やはり規定の15cmに届いているかどうかのハゴトコである。恐る恐るメジャーを当てると15cmを僅かに越えていた。魚の硬直で縮まることを考えると何とも心もとない。同じところに打ち込んでおく。かなりの間をおいて同じ竿がアクリを告げ、先程より少しマシなハゴトコがあがってきた。それでも17cm程か？ 遠投した竿には全くアタリがない。竿3本を集中的に同じ昆布根の回りに打ち込む。少しずつ少しずつ大きくなってきて25cmを最後にぴたりとアタリも止まってしまった。

## アブラコの踊り

他の釣り会の3名が古丹別川方面から嫁を求めて私の右隣りに入った。ハゴトコを何本か上げているようであったが、その中の一人がアブラコを引き抜いた。ガッツポーズとともに小踊りして跳びはねている。大きな雄叫びを上げながら仲間のところへ魚を掲げて走り寄る。悔しそうに応答していたその仲間もアブラコを釣り上げた。先程の御仁と同じようにやはり歓声を上げながらもう一人の仲間の所に走り寄り、魚を掲げながら踊りだす。捧 敏夫氏のホッケ祭りの音頭の様である。いい大人が子どものように振る舞う様は何とも微笑ましい光景であり、私も歓喜の渦に入って一睹に踊りたい衝動に駆られた。その楽しい光景が4回ほど繰り返された。しかし、その様子を遠くから眺める私は、ガッツポーズも小躍りすることも歓声を上げることもなく締め切り時間を迎えてしまった。

幌向のバス停で釣遊会のバスを待った。他の釣り会のメンバーもバス待ちのため集まって来ており、本日の釣りについての状況を交換し合った。その中で、昨年私が釣りバスに乗れずに困っていたところを拾っていただいた屯田釣友会のメンバーに出くわしてしまった。彼は、昨年この事件のことを明確に覚えており、それが私である事などすでにお見通しであった。改めて丁重にお礼を申し述べた。

## 審査結果

バスに乗り込むと、苫前港で奮闘していた秦野氏が迎えてくれ、嫁のソイは居たが婿のアカハラが小さかったとぼやいている。小平菘川で多くの会員を迎え入れたがどの顔も曇りがちだ。そんな中で阿部氏だけは満足気な顔をしている。名人会の金井氏の隣でアカハラを取り、最後の最後に嫁の黒がしらを抜き上げたとのことである。

審査の結果は

優勝	阿部重義	1097点	(アカ 487 mm + カレ 269 mm + 3410g)	小平右
準優勝	鹿島釣狂	1078点	(アカ 476 mm + ハゴ 242 mm + 3600g)	古丹別
3位	荻野一利	825点	(アカ 400 mm + カジ 280 mm + 1450g)	花岡
身長賞	山岸伸	48.3 cm	アカハラ	花岡

であった。



今回は皆成績が奮わず、1000点以上が2名ということで、寂しい大会となった。50cmオーバーの大物のオンパレードとなった昨年の小平菘川河口とは違って、アカハラの大物が釣れたのは阿部氏の入った所のみであったとのことである。お陰様で私に準優勝が回ってきたのである。

皆さん魚を求めて動き回ったのだろう。帰りのバスでは皆ぐったりし、ぐっすり眠ってしまった。私が歩いた距離もそうとうなものとなり、同じ様にお付き合いすることとなる。

砂川の「子供の国」にあるオアシスパークで昼食をとった。1400円でのジンギスカン食べ放題はかなりのボリュームがあり魅力的なものであった。皆さん、ヤケとも思える酒を飲んだこともあり、このあたりから元気回復し、次回の大会への夢を膨らませるのであった。